

こどもの身体形成と生活体験：社会的身体の形成を中心として

猪山, 勝利
長崎大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/9012>

出版情報：生活体験学習研究. 2, pp.1-7, 2002-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

こどもの身体形成と生活体験

—社会的身体の形成を中心として—

猪山 勝利

Social Body-Formation of Childhood and Life Experience

Iyama Katsutoshi

要約 こどもの現代的身体形成問題を研究する一環として、「社会的身体」形成と生活体験の連関について論及する。現代のこどもの人間形成問題の基底に「からだの崩れ」が指摘されているが、その原因の究明と再生に果たす要因、特に生活体験に焦点を当てて論及する。社会的身体形成の要因として、諸種の社会的形成があるが、とくに「身体《協同生活》体験」の学習や形成が重要であることを明らかにし、その内容構成を論及する。

キーワード 社会的身体、「閉じた」身体、「開かれた」身体、身体《協同生活》体験

1. 問題の所在

(1) 身体問題把握の基本視角

現代のこどもの問題として、身体問題が大きな問題となつている。自殺・他殺などの身体の根源にかかわる生死問題、病気問題・健康問題などの生理・生化学的問題から、薬物身体問題、性問題、心身症、仮想現実的身体問題、過労死問題など種々の身体にかかわる問題が社会問題化している⁽¹⁾。本稿は、こどもの種々の身体問題のうち「社会的身体」問題に関して論及することを目的としている。

問題を論及する前提として、身体にかかわる基本視角について、触れておきたい。

1つは、「身体」というカテゴリーをどのように把握するかである。「身体」カテゴリーについては、種々の論議があるが、ここでは{a. 「肉体」性、b. 「身体」(身)性、c. 「心身《錯綜体》性」}という身体把握視角のうち、筆者はbの「身体性」として身体を把握する。身体をそのように把握するのは、身体論の基底をなす「精神と身体」問題に関して、近代主義的2元論のように精神性と切り離れた身《体》—肉体性把握

でもなく、心身一元(心身一如)論の視座に立つからである。心身一元論は、そのうち「心身《錯綜体》性⁽²⁾」ととらえる精神優位的な《身》体性把握と身《体》を主体とした精神との連環性を根源にふまえた《身体》性把握の視角があるが、筆者は後者の「身体」の視角に立つ。

2つは、現代の身体問題には、「個体」としての身体把握では対応できない問題が種々生じており、この種の身体問題の研究が進む中で、身体を「個体」として把握するのではなく、「間身体」として把握しようとする視角である⁽³⁾。筆者は、対他・対自的身体性を重視する視点から「間身体」的視角を前提として論議していきたい。

(2) 身体相

現代の身体問題を把握していくと、あらためて身体の総合的構造について再把握する必要にせまられる。身体を《身》として、総合的に把握しようとしている市川浩は、身体を「錯綜体」としてとらえ、「成層的な統合体」と把握する視点を提起しており、身体総合学ともいえる論を構築している⁽²⁾。筆者は、市川浩の総合

連絡・別刷請求先 (Corresponding author)

長崎大学教育学部 (〒 852-8521 長崎市文教町 1-14)

Faculty of Education, NAGASAKI UNIVERSITY (Bunkyo-machi 1-14 Nagasaki City, Japan)

的身体構造論に学びつつも、精神性を主体に身体を論及する哲学としての視角ではなく、現実的身体機能論の視角から「身体の諸相」構造を提起したい。

筆者は、身体機能論の視角から、身体の諸相を以下の6層に類別して把握する。

A. 基底的身体相

(1) 生理的身体相

B. 活動的身体相

(2) 生産的身体相

(3) 生活的身体相

(4) 運動的身体相

(5) 文化的身体相

C. 対他身体相

(6) 社会的身体相

6つの身体相は、相互に関連して身体構造を形成しており、6の社会的身体相はA、Bそれぞれの身体相の対他関係身体相である。

身体機能論の視角から、身体の機能構造を6つの相に類別することについては、詳細な検討が必要であるが、その構造論については別稿にゆずり⁽⁴⁾、ここでは筆者が当面の課題にしている「社会的身体相」について、一応の概念づけをしておきたい。

『社会的身体相』とは、「人間の身体相のうち、『間身体』として、対他関係・行為において能動的、受動的に生じる対他・対自的身体相のことであり、当人が属する社会共同集団・組織の在り方と相互規定しあう身体相である。この身体相の具体的態様としては、コミュニケーション行為、性関係行為、人間関係行為、集団・組織参加行為などが含まれる。」なお、「社会的身体」という用語については、「ある特定の文化において意識される身体であり、社会システムの要請による整合性から生じる」脳化身体という独自概念を提起している養老孟司も、「脳化身体を社会的身体というべきかもしれない」と問題提起している⁽⁵⁾。

ところで、食、基本動作、病理などの生理的身体相、歩行やスポーツなどの運動的身体相、諸種の音声、表現・演技などの文化的身体相にかかわる身体問題は、身体と精神の相関問題まで含めて、現在までかなりの研究がなされている。しかし、生産的身体相、生活的身体相、社会的身体相については、現代において多くの身体問題が発生しているにもかかわらず、身体問題

としては生理的身体相や運動的身体相の適用論議に終始しがちであった。しかし、現代の身体問題を総合的に明らかにしていくには、それらの各相の身体問題は独自領域の研究課題として設定される必要があり、本稿は、社会的身体相問題、特にこどもの社会的身体問題について、若干の問題提起をするものである。

2. 「閉じた」身体

(1) こどもの「閉じた」身体状態

本稿は、こどもの「社会的身体相」の身体問題について論及するが、まず、筆者が社会的身体相について強い関心を抱いた動機について記しておきたい。社会的身体に関心を抱いたのは、1970年代にはいって、高校の生活指導研究の場であった。高校生活指導研究の重要な課題のひとつは、生徒が自主的、自治的に集団づくりをすることによつて、友人関係や社会関係を形成することを支援・指導することにあるが、1970年代以前は支援・指導の内容は自治的集団づくりの意義と集団組織化の方法を支援・指導すればよかったのである。しかし、1970年代になつて、集団の意義や集団組織化の方法を学習し、集団活動をしていても集団活動は形式的な参加活動にとどまり、友人関係や自治的社会関係を主体的に形成することが弱体化し、そのため集団自体が形式化していくという研究報告が提出されるようになり、教師の支援や指導方法以前の生徒の問題状況の分析の必要に迫られたことが、筆者が社会的身体問題に出会ったきっかけであった。

当時、すでに生徒の身体の生理的問題や運動的問題については、種々の問題提起がなされはじめていた⁽⁶⁾。すなわち、こどもの生活習慣病などの発生や身長などの体格は大きくなったが体力は低下したなどの身体諸問題の発生である。そのようなこどもの生理的問題や運動・体力問題の発生とともに、「社会的身体」問題が発生していたのである。すなわち、「閉じた身体」と総称される問題である。その後、この社会的身体問題は改善されるどころか、一層悪化し、「自閉」問題や自殺にいたるいじめ問題など一層の悪化状況を生起させている。

「閉じた身体」とは、「触れ合えぬ体」、「出会えぬ体」、「離れていく体」など⁽⁷⁾、個人の意欲や意識では友人関係や社会関係の重要性を学習して理解しているが、

俗に「身体がついていけない」身体問題の発生である。つまり、対他関係において「社会的身体」意欲はもちながら、実際の関係場面では身体が関係を防衛したり、拒否する身体状態である。このような問題に対して、性関係の早期化をあげた反論があるが、快樂手段的關係が進展しているのであり、主体的身体關係が形成されているとは言いがたい。したがって、上記したように生活指導における生徒の主体的集団組織化や参画は弱体なものになっていたのである。

こどもや青年の演劇指導において「閉じた身体」を問題視した竹内敏晴は、こどもや青年だけでなく教師など成人にも同様な身体状態があることを指摘し、そのような主体としての身体の喪失状態である「社会的身体」問題はこどもだけでなく現代人の身体問題として把握することを問題提起している⁽⁸⁾。このような身体状態について、現代の大きな身体問題として指摘した論者として、三橋修がいる。三橋修は、筆者の類別では生産的身体問題を主軸として運動的身体、生活的身体、社会的身体を中心に現代の身体問題を総合的に分析しているが、身体問題の把握を「身体とは、社会的なものの中であつてつくられていく⁽⁹⁾」とする視角から身体問題をとらえ、現代の身体問題の特質を総称して「翔べない身体」として特質づける。三橋は、竹内の「閉じた身体」よりもラジカルに把握し、現代の社会的身体を「個々の身体が消去され、情報単位」となっており、「徹底して『孤独』な身体となつている⁽¹⁰⁾」と指摘している。このような社会的身体状態は、現代コミュニケーションの特質として指摘される「コミュニケーション疎外」状況と極めて類似している⁽¹¹⁾。

そのような身体の対他関係状態は、対自状態として自己の身体を主体として把握できず、自己の身体をモノ化し、客体化する身体意識をもち、他者のまなざしに適應する社会的身体として身体を操作する身体状態となるのである。

(2) 「閉じた身体」の規定要因

上記したような「閉じた身体」身体状態を規定している現代的要因について述べてみたい。現代的要因として、社会的身体は生理的身体や運動的身体が生得的な要素が強いのにたいし、生得的要素は低位であり、発達の要素は高いので、まずこどもの社会的身体の発達に焦点をあてて規定要因について把握する。

こどもの「閉じたからだ」状態を規定する要因として、とくに3つの直接要因をあげることができよう。

1つは、遊びをとおしたこどもの社会的身体関係づくりである。この点について、総合的なこども調査をふまえて、深谷昌志は「現代もこどもの遊びは喪失していないが、『群れ』から『孤独』へ、『活動型』から『静止型』へ、そして『自発』から『受身』へと変質している⁽¹²⁾」と指摘している。このようなこども間の自主的な遊びの変質は、こどもの「間身体」体験の弱体化を促進している現代的直接要因である。

2つは、生活、社会関係体験による社会的身体づくりである。この点について、竹内は地域共同体におけるこどもの社会的任務をとおした『共生態としてのこどものからだ』学習の喪失をあげている。筆者もこどもの生活体験学習実践の研究から、現代のこどもの社会的身体問題状態として、地域におけるこどもの役割喪失と他世代との社会関係体験の弱体化が大きな要因であることを指摘した⁽¹³⁾。

3つは、いわゆる「仮想現実的体験」(バーチャル・リアリティ)による社会的身体への規定要因である。現代のこどもは、生活や地域での直接体験の弱体化と逆比例して、テレビ、ビデオ、ラジオ、マガジン、コミックなどの視聴体験や携帯電話、パソコンでの通信体験の比重が高まっており、「身体なき器官⁽¹⁴⁾化」とさえ指摘される身体状態である。

上記したこどもの現代の社会的身体状態は、こどもにだけ限定されず大人にも共通する現代の社会的身体状態であるが、現代の社会的身体問題を規定する基底要因として、つぎの2点はこどもから大人にまで共通する基底的社会要因である。

すべての社会的身体を規定している要因として、社会システムの管理化がある。言うまでもなく、社会システムの管理化とは、労働や教育が労働者や学習者の主体的な自己管理下になく、主導的決定権は管理層にあり、労働者や学習者は操作対象として競争させれ、管理される社会システムによる管理化のことである。三橋も指摘するように、管理される身体は管理システムに適合するために、自分の身体を操作可能なものとするため、操作物としてモノ化し、主体的身体は疎外され、徹底的に「孤独化」する身体である⁽¹⁵⁾。このような社会的身体は、会社人間、学校化人間として企業

や学校化外の時間の身体をも規定するのであり、現代の社会的身体の基底要因となつている。

2つは、創り、参画する身体を否定しがちな消費生活の進展である。遊びや生活という労働や学校の場とは異なつて、能動的な身体活動が可能とされていた生活領域においても、受け身の消費生活が拡大していることである。こどもの家庭や地域での直接体験が喪失しているだけでなく、大人の生活や遊びも身体を能動的に動かす創造体験が弱体化しており、そのことはこどもや大人の身体を受け身にするだけでなく、『個化』している。このことは、社会的身体づくりの原点ともいふべき『間柄』関係をつくる性関係や家族の人間関係をも規定しており、地域の共有身体体験の場とされていた祭りもイベント化することによつて能動的な身体体験が弱体化している⁽¹⁶⁾。近年は、さらに上記した「仮想現実体験」の比重がこどもだけでなく、大人の世界にも浸透しつつあり、このことも消費生活の進展に加重して社会的身体『個化』を強めている。

3. こどもの基本的な「開かれた身体」づくり

(1) 「開かれた身体」体験づくり

1節でも述べたように、社会的身体相は当該の社会システムに規定されるが、逆に反規定する主体要因でもある。本節では社会的身体自己組織化、主体化としての「開かれた身体」体験づくりについて、若干の問題提起を試みたい。

1つは、身体「接触」体験である。

家庭内でも個室化が進み、こどもの戸外活動が低下している現在、こども同士、こどもと多世代間の直接的な身体接触は、著しく弱体化している。したがって、幼児期からの家庭内の身体接触の促進とともに、自然体験、地域共同生活活動、地域身体文化活動での身体接触活動の再生が望まれる。近年、こどもや青年の地域踊り・ダンス文化が各地で活発になりつつあるのは、その現れであろう。

2つは、いわゆる身体「修行」体験である。

修行については、東洋的身体論を形成している湯浅泰雄が精力的に言及しているが⁽¹⁷⁾修行とは「身体の諸能力を訓練することを通じて、新しい自己を目覚めさせ、誕生させるエネルギー」であり、具体的には瞑想、常行、苦行、武道などの身体体験である。それらの修

行体験は、湯浅泰雄によれば、身体における体性系(感覚—運動神経系)とは異なる自律系(内蔵系)の身体訓練であり、身体の前意識化地平の活性化であつて、身体自然治癒力の活性化をもたらすものである。これらの体験は、基本的には言語を基底としたカウンセラーを超える「フォーカシング療法⁽¹⁸⁾」と並んで、治癒力回復としてより能動的な身体体験であり、こどもの心身治癒力形成にとりいられつつある。

3つは、「身体表現」体験づくりである。

この体験づくりについては、竹内敏晴の演劇トレーニング訓練・療法がある⁽¹⁹⁾。竹内は、「《からだ》を解きほぐし、歪みを破り、《からだ》が他人にふれることを怖れず、喜びを感じるまでになる」ような演劇による表現体験づくりを試み、管理化された身体の回復体験づくりを展開している。この体験によつて、他のひとと「触れ合え」、「出会える」基盤づくりが可能である実践を形成している。とくに、竹内の支援・指導管理化の底辺に位置づけられたこどものからだの硬直性の開放実践による「開かれた身体」づくりは、管理システムへの逆基底体験として注目に値する。この実践には、修行が現実の管理状況からの「逃れ」や「現実超越」へ傾斜することと対比すると、この体験の現代的「社会的身体」体験がもつ基本的意義が了承されよう。竹内の理論を支柱に学校の授業でこどもの表現体験づくりについて追求している鳥山敏子も、身体表現を重視し、「自分の自然(身体)を他の価値観、評価から自由になる」身体体験学習実践を身体論として提起している⁽²⁰⁾。鳥山は、「硬くなっている」からだ感覚の解放と表出活動を基礎とし、からだ表現活動をこどもたちが自己組織化していくことによつて、「相手の世界に入り、相手も自分の世界に入って、世界を共有する。互いに別々でありながらそれぞれのイメージを共有してしまうからだになる。」体験を創出している。その体験づくりは、「表現を抑制する現代の社会システム」からの離脱と逆組織化の実践を組織化する基礎づくりを構築していると言えよう。さらに、近年、身体表現活動を発展させた活動論として、身体感覚の基本形成に挑戦している斎藤孝の理論と実践は、竹内と同様に「ことばとからだ」関係を基底にした社会的身体形成の新たな実践として注目される⁽²¹⁾。

4つは、「遊び創造」体験づくりである。

深谷昌志も指摘しているように、現代のこどもは遊びを喪失しているのではなく、こどもの遊びが「孤独化」、「静止化」、「受け身化」していることに特質がある。このような遊びは、おとなの遊びが労働の延長のように機械化し、消費化していると同様に、「学校化」の延長となっていることを示している。このような遊びの特質は、身体を生理的健康や運動的機能に特化して、身体を「手段として客体化、無化」していく身体作用に限定する遊びといえる。M.チクセントミハイは、従来の遊び研究をふまえて、フロー経験となる「自己目的的、創造活動」こそ遊びの本質であると再把握して、この遊び体験こそ学習や仕事の組み替えとなることを問題提起している⁽²²⁾。彼のフロー活動体験は、まず「こどもの学習は身体を自己目的的、創造的に行為することが基礎である」ととらえ、そのことによって「他のこどもたちと共同化が形成され、学習が自主的、主体的な内発的行為」となることを論証している。このような遊び創造体験が現代的身体づくりとして再生、再評価されていく必要がある。

5つは、生活参画体験づくりである。

生活体験を用務としての「家事」や消費化ととらえるのではなく、生活創造体験であり、協同参加体験として再把握していくと、生活参加体験はM.チクセントミハイがフロー活動論で指摘しているような、身体行為の自己目的的な自己組織化が働き、身体活動による他との協同化が促進される。今日、生活を生活文化として再構築し、創造と協同の生活参加が問題提起されているが⁽²³⁾、そのような生活文化への参加体験は、創造的な社会的身体づくりを促進することが判明しつつある。このような生活参加体験と同様に、仕事や学習体験も同様の再構築がなされれば「開かれた」社会的身体づくりとして作用していくことはいうまでもない。この領域については、次節でさらに深めて論及したい。

6つは、自然・環境体験づくりである。

現在、環境破壊や資源問題を主体に環境保全活動が活発になっている。環境保全活動の取り組みの中から、近年環境文化体験づくりが形成されつつある。環境文化体験とは、当初環境保全活動の基礎作りあるいは取り掛かりとして、環境に親しむ体験として出発した。しかし、今日では従来の機能とともに、あらたに身体とのかかわりで体験評価がなされつつある。環境文化

体験とは、具体的には、自然感受体験活動、ネイチャーゲーム、創作体験活動、野外スポーツなどから構成されるが⁽²⁴⁾、「自然との親和による身体の開放や再確認」といわれ、身体感覚の覚醒、身体のリラクセーション、自然と人々との共生感情が形成される。このような環境文化体験は、社会的身体にとって自然との「共生」感覚の習得とともに、他の人々との親和感情の生成を形成するものであり、「開かれた身体」の基礎づくりとして機能していくのである。

(2) 「開かれた身体」の基底要因の改革

前節において、「閉じた身体」の要因について述べたが、本項では「開かれた身体」づくりを保障する基底要因について、述べてみたい。

元来、身体の働きには管理的なタテ・ツリー型の自己組織化よりも、多次元ネットワーク型の自己組織化を主体とする向性的働きがある⁽²⁵⁾。したがって、「開かれた身体」体験づくりそれ自体が、「閉じた身体」を規定している要因を改革していく基盤であり、そのことを抜いて改革はない。しかし、「開かれた身体」を保障していくには、身体を規定する外在的要因自体の形成も重要である。

その1は、身体がはたらく「場」の再組織化が求められる。自然体験の場、遊び体験の場、身体表現の場づくりであり、家庭や地域社会など生活文化が展開する生活の場での身体がはたらく社会空間の設定である。

その2は、学習や労働の細分化、効率化システムを改革して、身体のはたらきを内包した総合化を推進していくことである⁽²⁶⁾。

その3は、学校、企業など社会システムの管理システムの改革である。現在、「労働の人間化」として企業経営システムを自己組織化していく動向⁽²⁷⁾や学校文化の改革動向⁽²⁸⁾が胎動しつつあるが、そのような社会システムの改革が2節で述べたように、社会的身体を「開かれた身体」として形成していくための、もっとも基本的な保障要因である。

4. こどもの社会的身体形成と生活参画体験の構造

(1) こどもの社会的身体形成と生活参画体験の基礎的視点

3節において、こどもの社会的身体形成に関連する基本的体験づくりを論及した。この節では、前節の5

の生活参画体験について、その構造化と基礎的あり方について論及するが、筆者は、こどもの現代的生活体験の構成について本学会誌で試論を提示したので⁽²⁹⁾、本稿では社会的身体形成にかかわる生活参画体験について言及する。

生活参画体験の内容を明らかにするために、以下の5点を基礎的な視点として設定しておきたい。

第1は、生活参画体験が展開する空間としては、家庭だけでなく地域コミュニティも視野にいれてとらえることである。

第2は、こどもの社会的身体を形成する際、その生活体験機会を親や地域住民が設定することは必要であるが、その生活体験をこどもが受け身で参加するのではなく、企画や運営に主体的に参画することが重要である。

第3は社会的身体形成にかかわる生活体験を《生活参画体験》ととらえるのは、こどもの社会的身体の内実を社会に適應する「社会性」ではなく、「社会創造力」と積極的に把握することが重要であると考えからである⁽³⁰⁾。

第4は、協同生活性の視点である。すなわち、伝統的な「集団生活体験」でなく、個人性を前提として主体的に社会参画する《個・協同》生活体験である。

第5は、こどもが生活参画体験を行う場合、こどもにかかわる青年、成人、高齢者は指導や支援ばかりでなく、こどもと協同して生活参画体験を行う「協同活動者」としても位置づいていくことが重要である。

(2) こどもの社会的身体を形成する生活参画体験活動構造

こどもの社会的身体を形成する生活参画体験として、以下のような参画体験が指定できよう。

① 生活「協同コミュニケーション」参画体験

生活協同コミュニケーション参画体験とは、こども同士やこどもと多世代が祭りなどの交流・親睦体験活動や地域コミュニティの創造にかかわる協同討議などに協同して取り組む活動である。

② 生活協同「自然・遊」参画体験

生活協同自然・遊体験とは、こどもが身体経験として自然体験や戸外遊び体験を協同して行う活動であり、直接的身体接触や身体活動アンサンブルが形成されやすい。

③ 協同「基本生活」参画体験

協同基本生活参画体験とは、こどもが協同して一定期間寝食を共にし、食事、風呂、洗濯、コミュニケーション会話、協同文化などを協同して取り組む活動であるが、近年、通学合宿や高齢者宅ホームステイ活動として進展している。

④ 生活協同「仕事・文化・レクスポーツ」参画体験

この領域の参画体験活動は、身体相の活動領域であり、かなりの展開がなされているが、金銭価値や競争価値を基本として展開する場合が多い。したがって、競争や金銭価値を超えた協同活動として再生していくことが不可欠である。

⑤ 生活協同「家庭・地域創造」参画体験

生活協同「家庭・地域創造」参画体験とは、こどもも家庭や地域の主体的担い手として家庭生活や地域コミュニティづくりに参画する体験であり、こどもと親・地域住民との交流・協同性が形成しやすい。さらに、この活動を通して協同身体性のある「相互存在愛」、社会協同価値意識、生活言語、コミュニケーション、からだづくりなどが形成される度合いは高い。

注

- (1) 松岡正剛「何故、人間は身体に懐かしさを感じるのか」萩原朔美監修『身体の現在形』愛知芸術文化センター 1992年
- (2) 市川 浩『《身》の構造』青土社 1984年 20頁
- (3) 広松 渉『哲学の越境』勁草書房 1992年 98頁
湯浅泰雄「身体と間身体関係」『現代社会学4』岩波書店 1996年 67頁
- (4) 猪山勝利「社会的身体」『身体論の現在』大蔵省印刷局 1996年 36頁
- (5) 養老孟司「『日本の身体』論」前掲『現代社会学4』
- (6) 正木健雄『こどもの体力』大月書店 1980年
- (7) 竹内敏晴『こどものからだとことば』晶文社 1983年
- (8) 竹内敏晴 前掲書 65頁
- (9) 三橋 修『翔べない身体—身体性の社会学』三省堂 1982年 192頁
- (10) 三橋 修 前掲書 179頁
- (11) 尾関周二『現代コミュニケーションと共生・共同』

- 青木書店 1995年
- (12) 深谷昌志『孤立化する子どもたち』NHK ブックス436 1983年
- (13) 竹内敏晴 前掲書 30頁
横山正幸、猪山勝利、正平辰男『生活体験学習入門』北大路書房 1995年
- (14) 浦 達也「身体なき器官」前掲書(1) 199頁
- (15) 三橋 修 上掲書 179頁
- (16) 三橋 修 上掲書 258頁
- (17) 湯浅泰雄『気・修行・身体』平河出版社 1986年
- (18) E.T.ジェンドリン『フォーカシング指向心理療法』金剛出版 1998年
- (19) 竹内敏晴「からだとことば」前掲『現代社会学4』
- (20) 鳥山敏子「身体の変現」上掲『現代社会学4』124頁
- (21) 斎藤 孝『身体感覚を取り戻す』NHK ブックス 893 2000年
- (22) M.チクセントミハイ『楽しみの社会学』思索社 1979年
- (23) 谷川一男編著『生活文化の経済学』嵯峨野書院 1989年
- (24) 清里環境教育フォーラム実行委員会『日本型環境教育の提案』小学館 1992年
- (25) 市川 浩 前掲書 76頁
- (26) 山田日登志「『分業の世紀』は終わった」『論座 2001-10号』朝日新聞
- (27) 嶺 学『労働の人間化の展開過程』お茶の水書房 1995年
- (28) 木原孝博他『学校文化の社会学』福村出版 1993年
佐藤 学『学びの身体技法』太郎次郎社 1997年
- (29) 猪山勝利「こどもの生活体験学習の現代的構成に関する研究」『日本生活体験学習 学会誌 Vol.1』 2000年
- (30) 門脇厚司『子どもの社会力』岩波新書648 1999年